

DXハイスクール伴走支援事業

ブロック別の取組実践発表会

・研究協議会実施レポート

－ 11/28実施関西ブロック－



実践発表会①（奈良県立奈良南高等学校）

実践発表内容

実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	奈良県立奈良南高等学校
発表テーマ	文理横断的・探究的な学びにおけるデジタルの活用方法
発表内容要旨	<ul style="list-style-type: none"> ■ 取組の概要 <ul style="list-style-type: none"> ● AIプログラミング等の学習及び、同じ専門学科を持つ学校間、大学、企業等との連携を推進 <ul style="list-style-type: none"> - 課題研究発表会や各種研修など連携した授業を実施 ● AR・VRなどの最新技術を活用し、世界遺産である吉野地域の観光や特産品などを地元に応用する開発プロジェクトを実施 ■ 取組がうまくいったポイント <ul style="list-style-type: none"> ● 生徒が高性能PCやVR機器の基本操作を身につけることで、小中学生を対象としたイベントへの参加率や高性能PCへの活用率の増加に直結した点 ■ 直面した課題と対応策 <ul style="list-style-type: none"> ● 課題は3年間の体系化した専門教育にDXの学びをどのように繋げるか ● 学校間連携・高大連携について、現状は準備不足 <ul style="list-style-type: none"> - 建築探究科については、26年4月から伝統建築科へ学科改編し、さらに外部連携を推進する予定

指導・助言者によるFB	<ul style="list-style-type: none"> ■ デジタルを活用し、地域の魅力をどのように発信するかについて取り組んでいる様子が伺えた。発信方法は従来の手法も多くあるが、その中で生徒が自分たちの課題を把握して、どのように見せていか、広げていくのかを自分事として考えられる仕組みを構築することが重要である ■ 学習時間の長さやカリキュラムから情報科学科の生徒とその他生徒で知識や技術の深さに差が生まれるのは必然だが、両者が共同PJなどを進める際に、情報科学科の生徒にどのような期待を寄せるのかを意識して進めたほうが良い ■ リモートで活動を行う際には、生徒同士が自主的にコミュニケーションを取れる環境づくりが大切である
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> ■ アンケート分析をされているという話があったが、具体的にどのような内容のアンケートを実施しているのか？ <ul style="list-style-type: none"> ⇒ 校内の生徒に対する調査であり、主に「本校の魅力をどうすれば発揮できるか」、「本校に魅力が無いのはなぜか」、「学生が集まらないのはなぜか」といった、生徒の率直な意見を集めることを目的としている ■ 生徒自身がイベントを自主的に開催していると伺ったが、先生からのサポートはあったのか？ <ul style="list-style-type: none"> ⇒ 先生によるサポートも一部あるが、理想としては、イベントを開催するに当たって必要な運営面の力を生徒たちが身につけることを目指している



実践発表会②（大阪府立池田高等学校）

実践発表内容

実践発表を受けたフィードバック（FB）・質疑応答

発表者	大阪府立池田高等学校
発表テーマ	外部専門人材の活用・関連機関等との連携
発表内容要旨	<ul style="list-style-type: none"> ■ 取組の概要 <ul style="list-style-type: none"> ● 学科を横断したDX委員会や機器を配置した部屋を整備 ● 外部連携先は大阪大学・大阪成蹊大学 <ul style="list-style-type: none"> - 前者は総探のテーマへのDXの組込を共に検討中 - 後者は包括連携協定を締結し、大学訪問、教職員向け全体研修を実施 ● 商工会議所やリクルート社とも連携し、生徒の関心が高いモノづくりや、データ収集・活用について取組が進行 ● 今後の学校・生徒像としては、日常的に総合探究要素の取組が行われる学校、日常生活の中で抱いた疑問や課題解決策を行える生徒を育てたい ■ 授業がうまくいったポイント <ul style="list-style-type: none"> ● 大阪成蹊大学と連携した教員研修により、DXの基盤となる講習が実施出来た点 ■ 直面した課題 <ul style="list-style-type: none"> ● 企画の立案、テーマ設定の難しさや既存カリキュラムへの組み入れの難しさ ● 対策として大学の研修やシンポジウムへの参加、他校の実践事例の検討などアンテナを高く持つようにしている

指導・助言者によるFB	<ul style="list-style-type: none"> ■ 土台としてDXハイスクールを機に組織体制を整えた点は目新しい。また、部屋の整備という拠点づくりも重要 ■ 組織体制や環境作りが3年生の総合的な探究の取組に繋がっていると感じた。取組の中心は理系の先生だと思うが、商工会議所やリクルート社など、理論を突き詰める以外に社会課題への感度が高い外部との連携が取れているのは良い点。現在の組織体制では、DXハイスクールが理系の取組に閉じてしまわないか、課題感をお持ちかが知りたい ⇒大学連携する中で、分野に特化した先生が必要であり、初期的に理系の先生が中心となっている ■ 全校で教員研修に取り組んでいる中で、各先生に対して、ご自身の専門分野でどう活かせるかなどの観点で意見を引き出すと、より裾野が広がった取り組みになる
質疑応答	<ul style="list-style-type: none"> ■ DX関連の教員研修は1学期ごとに何回開催されているか？ ⇒昨年は年間3回実施した。回数は決め打ちではなく、必要に応じて取組んでいる。昨年3回の研修テーマは初回が「入門的なDX講義の研修」、2, 3回目は「3Dプリンタ等の機材の操作方法や授業への活用方法」である

グループ協議① – 実施報告 –

グループ協議概要

※敬称略

文理横断的・ 探究的な学 びにおける デジタルの活 用方法	参加校数・ グループ数	118校 (22グループ)
デジタルの活 用等に関連し た校内研修の 実施	参加校数・ グループ数	71校 (13グループ)

グループ協議の発表内容

グループ11	<ul style="list-style-type: none">● 2つの課題に対する議論を行った。1つ目はデータ処理におけるデータ活用に関する課題。2つ目はデータ処理の問題。後者に関して、生徒に配布される機材はiPadだが、教師の端末がWindowsのため、Excelが上手く扱えないという悩みが特に共感を持たれていた● その他、DXハイスクール事業を進める先生は理系が多い中、どのように文理横断の学びとして連動させていくかという課題の共有を行った
グループ33	<ul style="list-style-type: none">● 生徒の関心を高めるデジタル課題活動の議論に近くなってしまったが、3Dプリンターに関して議論を行った● 課外活動の参加率が低いという運営面の課題と外部人材をどのように見つけてくるかについて議論した

グループ協議② – 実施報告 –

